

2013 年度入学生を迎えて

公立大学法人山梨県立大学長 伊 藤 洋

今日、ここに山梨県知事代理平出^{わたる} 亘 副知事、山梨県議会浅川力三議長をはじめ山梨県内各界の代表のみなさまのご列席を賜り、国際政策学部 99 名、人間福祉学部 94 名、看護学部 101 名、以上 3 学部合計 294 名、および大学院看護学研究科看護学専攻修士課程 7 名、総数 301 名の新入学生を迎え、第 9 期入学式が挙行できますことは、私ども教職員ならびに在生にとりましてこの上ない大きな喜びであります。また、新入学生諸君を今日まで育ててこられたご家族をはじめ全ての皆さんに、心からお慶びを申し上げたいと存じます。

さて、今日の入学生の大多数を占める学部入学生のみなさんのほとんどは、義務教育と高等学校の 12 年間の普通教育を終えた人たちですが、こうして本学に入学したということは、「皆さんが自分自身の人生を通じて身を置くべき専門性、生涯にわたる社会的・経済的枠組みを自らに限定した」ということになります。換言すれば、高等教育機関である大学に入学したということは、卒業後に従事するであろう職業またはプロフェッションについての大枠を自らに設定したということの意味します。大学教育というものはそういうものなのです。その限りにおいて子供の時に描いていた何にでもなれるという「夢」は消滅することともなります。プロになるということは空想的な夢を放棄して現実的な計画を描きなおすということの意味しているのですが、皆さんにはその覚悟はおありでしょうか？

たとえば、看護学部看護学科の入学生なら、医療に関わる専門的職業人として立つという覚悟をもって入学されたはずです。事実、本学看護学部では「**学問的探求心を持ち、看護学の発展に貢献でき、倫理的視点と科学的思考により、自己の考え方や行動を決定し発展させることができる高い**

資質を持った看護実践者を育成します」と学部のミッションに掲げられています。こういうミッションの下で教育を受け、学習をしていく中でみずからの可能性を確実に自己のものにしていくということ、それが看護学科で学ぶということの謂です。

今年の正月松の内の 5 日、「厳寒の候、先生方におかれましては未来の看護師の養成にご尽力のことと拝察いたします。この度、是非お礼を申し上げたく、ご多忙中御迷惑かと思いましたが一文を送らせていただきます」という書き出しのお手紙が私宛に届きました。差出人は甲府市内に住む山村貞平さんという方です。山村さんからご了解を得ていますのでそのお手紙を読んであげましょう；

「私は昨年 12 月 10 日に、山梨県立中央病院心臓血管外科に腹部大動脈瘤のため、人工血管置換手術をうけるために入院いたしました。入院当日主治医の先生・担当看護師さんと共に実習生を付き添いにしたいがどうかと打診がありました。もちろんそれには快く応じました。その学生さんは確か秋山さんという笑顔の素敵なお嬢さんでした。私の手術の立会いから度々看護師さんのお手伝いを熱心にこなされ、採血・点滴・心電図を除いて、呼吸音・腸の運動の確認、体温・血圧・酸素量・体重の測定、足背動脈そくはいどうみやくの閉塞の有無などなど単独で確認してくださるという成長振りには、ほとほと感心いたしました。(勿論看護師のご指導のもとだと思いますが) しかも歩行訓練の補助までしてくださったので私の体力はみるみる回復いたしました。多くの入院患者さんがおられるのに私は本当に幸運でした。

私事で恐縮ですが、私は神戸の六甲山の麓で育ち、あの阪神大風水害の濁流にも遭い、疎開もせず米軍による大空襲の火災の中を潜り抜けてまいりました。大学卒業後、神戸市の公立学校で 38 年間教鞭をとり定年で無事退職しました。その後生来の趣味を活かそうと山梨の地を選び、日本百名山・山梨百名山を目指して頑張っただけでまいりました。後わずかで成し遂げできなかったことが残念ですが、昨今は JR 沿線のハイキングで補っております。そのさなか今回の病にかかり入院となったわけです。

実習生の秋山さんにはひとりの老患者との一期一会と思いますが、私にとってはまさに地上での「天使との遭遇」でありました。本当に有難う

御座いました。先生方のご薫陶の賜物かと存じます。

同封の写真は、秋山さんが欲しいと言われた山の写真ですが、県内には著名な写真家や名カメラマンが多数おられるので、ありきたりの山岳風景や高山植物の写真では見飽きておられると思いますので、滅多にお目にかかれない鳳凰三山の薬師岳で偶然捉えた「ブロッケン現象」の一枚を送ります。(中略) 末筆ながら先生方のご多幸と、若き看護師さんの精進を祈り失礼いたします。 敬具

文中「ブロッケン現象」とは、太陽光などが背後から射し込み、影の側にある雲や霧のツブによって光が散乱され、光輪となって現れる大気光学現象のことです。この光輪に浮かぶ像を菩薩像や観音像と見立てた結果が観音岳とか薬師岳などという山の名が多く付けられるもとになりました。この投書者山村さんは登山家でご自身がしばしば体験されたブロッケン現象に浮かぶ光輪像を学生秋山千恵さんに置き換えて感じたのでしょう。文中にある「天使との遭遇」というのはそんなイメージが言わせた言葉かも知れません。

ここまでくればお分かりですね。患者と呼ばれる病床にある人々にとって、その枕頭に立つ医療従事者がどのような存在であるか、そしてそのために私たちは何を学び、どのように行動しなくてはならないかということが。この手紙は、看護学部入学生の学習目標をしっかりと教えてくれた一通でした。このお手紙を招きよせた看護学科学生「秋山千恵さん」を私は誇りに思います。

つぎに、2月12日深夜、私の若い友人小澤智之さんから「きのう、うれしい出来事がありましたので、報告させて下さい」という書き出しで始まる一通のeメールが届きました。これも原文のまま紹介します。

「東日本大震災で津波の被害を受けた岩手県陸前高田市の出身で、山梨県立大学4年の菅野結花(かんの・ゆうか)さんが制作したドキュメンタリー映画『きょうを守る』が、きのう開催された第4回「座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル」のコンペティション部門で「新人賞」を受賞しました。

「座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル」は、記録映画、教育映画、テレビドキュメンタリーといった、あらゆるドキュメンタリーを一堂に集めて上映するイベントで 2010 年から毎年開催されています。コンペティション部門は、映画・テレビ・自主制作などプロ・アマ問わず、新しい才能を全国から発掘するため第 1 回から行われており、今年は全国から 52 作品の応募がありました。

映画「きょうを守る」は、岩手県陸前高田市出身の菅野さんが、東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けたふるさとを訪れ、母親や同級生、知人など 9 人のインタビューで構成されている作品で、被災者それぞれの「震災」が語られています。

きのうは一次審査、最終審査を経て入賞した全 4 作品の上映が行われた後、ジャーナリストの田原総一郎さんや映画監督の森達也さんら 5 人の審査員により、大賞が決定されました。

その結果、今後を期待を込めて、菅野さんの作品「きょうを守る」のために急遽、新人賞が新設され、受賞することとなりました。テレビ局のドキュメンタリーなどが目立つ中での菅野さんの作品の受賞は、大賞は逸したものの、高い評価を得ました。

なお、新人賞を受賞した菅野さんは、授賞式で挨拶し、「地元・岩手県の新聞社に就職が決まり、今後でもできる限り被災地を見つめる活動を続けていきたい」と抱負を語りました。

私は、2011 年この作品の企画が立ち上がった時から国際政策学部前沢哲爾教授と共に菅野さんのサポートをしてきました。菅野さんにカメラ操作やアングルの基本を教え、2011 年 7 月には陸前高田市の撮影に同行し、インタビューの際のカメラを一部担当しました。この作品は、映画製作を勧めた映画監督の崔洋一さんや主題歌を歌った覚和歌子さんなど多くの方々の力が注がれた結果、有識者の高評価に至ったと思います。私も関わることができ、とてもうれしく思っています。以上」

文中の崔洋一さんは、日本映画監督協会理事長。常に話題を呼ぶ前衛的な映画監督としてよく知られた人です。また、覚和歌子さんは皆さんもご存知の『千と千尋の神隠し』の主題歌を作詞・作曲した山梨県出身の詩人

で作詞家で歌手である覚和歌子さんのことです。

なお、この映画作品は国内のみならず外国、特にアメリカの大学生たちから非常に注目され、全米各地で上映会が催され、パターン化されたマスメディア情報では得られない息づかいの聴こえる映像作品として高い評価を得たものです。

現代に生きている皆さんが、過去に先人が築き上げてきた知識を学ぶときに、それを過去の定型な知識として棒暗記するのではなく、講義室で得た知識や知見を現在の生きた社会に応用し展開していく力、それが大学で学ぶということです。

菅野結花さんは国際政策学部学生でしたが、本学の国際政策学部が目指す「**グローバルな視点に立って地域社会の問題点を分析し、解決案を提案できる力**」を着実に身に付けて卒業できた一人ではないかと私は確信しています。

看護学部・国際政策学部の学生達の活躍を見てきましたので、最後に人間福祉学部の学生達の活躍についても紹介しておきましょう。

これも、大学宛に届いたお礼の投書です。その e-mail の subject は「学生ボランティア参加に感謝」というもの。メールの差出人は山梨県ボランティア協会会長で本学非常勤講師でもある「岡尚志さん」、受信者は前人間福祉学部長藤谷秀先生です。

「拝啓 寒い日が続きますが、そこかしこに「光の春」を感じる今日この頃です。お元気でお過ごしのことと存じます。

さて、今日は学生ボランティアのことですが、お陰様で今日も県立大学の学生達が大勢参加して、2月24日に行われる「子どもの広場」の準備を進めてくれています。

県立大学の学生達はおおむね 20 名くらい、他の大学生、高校生など総勢 60 人くらいの若者が企画運営をする楽しい子どもの広場です。皆さん喜々として行動しています。

このような場に参加して、彼ら・彼女達は自分の世界を大きく広げていくことでしょう。とても嬉しい思いでご報告申し上げます。以上」

ここに、「子どもの広場」という催し物については主催者側の次のような説明がしていました。「県内で子どもたちを対象としたボランティア活動に取り組む団体、グループや学生で構成する『子どもの広場実行委員会』が企画・運営をし、山梨県ボランティア・NPO センター全館を開放し、子どもたちに多くの人との出会い・ふれあいを通じて楽しいひとときを過ごして貰おうという会です」と。

ところで、本学人間福祉学部のミッションは「**高度な専門知識と技術、深い共感的理解、問題解決への知的探究心、協働できる力を持ち、乳幼児から高齢者まで誰もが人間らしく、その人らしさを発揮して生活できる地域社会づくりに主体的かつ実践的に貢献できる人材を育成します**」としています。この学部ミッションに合わせてみれば、前述の御礼の e メールにあった活動の意味は明白です。

いま、時代は新自由主義経済、ネオ・コンサーバティブの時代だと言われています。規制緩和によって政府のコミットメントを可能な限り排除して、自由競争の下で優位なものが生き残ることによって効率的な経済社会が創造できると主張する考え方です。しかし、その反面、競争に敗れた組織や人々が社会から排除されるという格差社会が実現してしまいました。こういう時代にあって、セーフティネットとしての福祉社会の構築は必須です。そのために、表通りの華やかさに幻惑されずに社会的裏面に目配りできるまなざしがここでは発揮されなくてはなりません。福祉のプロフェッショナルにはそういう社会的・時代的期待が注がれているのです。人間福祉学部で学ぶということはそういうことなのです。

話をまとめましょう。以上を要するに、私が皆さんに伝えたいのは、今日を限りに皆さんは皆さんの人生を投入する専門家への道に歩みを始めたのだということ、そのための強い意識をもってあたるべきこと、ということ。4年後に自信をもって専門家として生きるトバ口を探り当てられることを大いに期待したいと思います。

最後に大学院看護学研究科修士課程進学者の皆さんに申し上げます。すでにご存知と思いますが、本学研究科の学位授与基準（ディプロマポリシー

一) は、「①看護学と看護実践の発展に寄与するための研究の基礎的な能力や組織・制度変革を推進することのできる能力を身につけている。②専門分野における研究能力や理論に裏付けられた高度な看護実践能力を身につけている。③優れた教養と高い専門的知識を有し、職業的倫理を深く理解した看護のリーダー及び教育者としての能力を身につけている」となっています。このように本課程修了後には医療現場の組織や制度変革を推進することができるまでの高いレベルのリーダーとなることを要請しています。

医療の現場は、人間が作るあらゆる社会的「記号」が籠められる場所です。それだけに現代社会が内包する政治的・経済的・文化的問題が複雑に絡み合いながら益々医療現場の問題を深刻化させていきます。そういう中であつていよいよもって高いレベルの臨床の知を皆さんは社会から・時代から求められているのです。

日本の医療現場は、前近代と超近代とが混在する様々な合理・不合理の混在するコンプレックス社会を形成しています。いま政界で論議されている TPP の問題なども早晩医療現場を、攪乱とまで言わなくとも、大変革を余儀なくさせることは必定です。皆さんへの期待はますます、弥が上にも高まってきます。ご健闘を心から期待いたします。

以上、全入学生のみなさんに期待を込めて私の歓迎のあいさつと致します。

ご清聴、有難うございました。